

新刊

□池ノ上利幸：花を訪れる蛾たち。知られざる姿を求めて。A4. 215 pp. 2008. ¥6,000. 昆虫文献六本脚。ISBN: 978-4-902649-08-6.

花粉媒介動物として、蝶や蜂や虻はよく知られているが、蛾はよほど特殊なケースでないこと認識にのぼらない。共進化の研究観察対象として蛾が登場するけれど、蝶よりはるかに種類の多い蛾のほんの一部に過ぎない。だいたい蛾の活動は夜間が主体なのに、花は夜は眠っていて送粉行動はお休みだろうという先入観を持っていた。本書の2-80頁は、花の上で吸蜜したり休んだりする蛾の姿が、各頁8枚のカラー写真で記録されていて、その姿や模様の多様さにあらためて驚かされる。ほとんどの写真は、口吻が花に差し込まれている状態が捉えられており、吸蜜行動であることがわかる。

81-204頁には、620種類についての訪花行動などが簡潔に記されていると共に、その蛾の訪花が観察された植物名が、多くの場合複数示されており、著者の観察・記録の綿密さがうかがわれる。ピロードナミシヤクは54種類もの花で観察されている。

私としては、蛾の名前よりはその訪花植物名の方に興味があるのだが、残念ながら本書には植物名索引はない。そこで植物名を抽出して、どんな植物が観察対象となったかを調べてみた。夜間撮影が多いので、もしかすると撮影し易い花に偏っていて、蛾と花の相互関係を掴むには不足していないだろうか、と思ったからだ。

全部で173種類の植物が記録されていた。観察された植物の種類数の多い科を挙げると、キク科(38種類)、バラ科(15種類)、マメ科(9種類)、ツツジ科(8種類)、スイカズラ科(6種類)という具合。一方、一種類の花で記録された蛾の種類数は、セイトカアワダチソウ(173種類)、フジ(168種類)、クリ(164種類)、ウツギ(118種類)、ヒヨドリバナ(126種類)、リョウブ(116種類)、イタドリ(92種類)等々である。なお写真には、「食事をしない蛾」という見出しでオオミズアオやカレハガなどが示されているが、これらは索引には出ていないので、著者が蛾と花

の関係を意識して本書をまとめたことがわかる。ユウスゲは花粉授受のほとんどを蛾に依存している、との記事もある。

かねてからキブシのような、まだ早春の寒い時期に、地表ではなく風通しの良い空中で咲く花がよくも結実するものだと疑問に思っていた。ヤガの類が活動することは聞いていたが、本書では65種類もの蛾が記録されており、観察のねばり強さに驚嘆した。撮影し易い花に偏っているのでは?と疑ったのは軽率だった。アザミ属5種類については76種類の蛾が観察されているが、これは盗蜜に当たるのだろうか? 著者の1000回を超える観察の成果で、植物の繁殖行動を知る上で重要なヒントを内蔵している。昆虫文献六本脚の連絡先は〒102-0075 千代田区三番町24-3 三番町MYビル (Tel. 03-6825-1164 Fax. 03-5213-1600). (金井弘夫)

□中庭正人：観察ガイドブック「茨城の海藻」B6版(オールカラー)。128 pp. 2008. ¥1260. 暁印書館。ISBN: 978-4-87015-165-9.

茨城県沿岸は寒流に洗われる日本の南端に位置し、海産生物にとっての大きな分布境界が存在する。海藻も例外でなく、ここが寒海域の海藻の分布の南限である種が多く生育する。

著者は高等学校教諭として勤務のかたわら、47年の長きにわたり茨城の海藻の研究を続け、その集大成として本書をまとめている。茨城県沿岸に生育する代表種141種が潮上帯、潮間帯上部、中部、下部、低潮線付近、潮下帯という生育帯の区分順に、1頁に2種ずつ、必要に応じて生態写真や顕微鏡写真も混じえて掲載されており、実地観察のガイドブックとして大変に使いやすくてきている。巻末には30頁を投じて茨城県の海藻観察地をほぼすべて網羅しており、現場の調査には大いに役立つ。

海洋生物生態系の長期モニタリングの必要性がさげられる中、著者のような地元で根ざした方々の長年の観察記録は重要な価値を持つ。さらに、著者は自費で「茨城の海を訪ねて47年(1961-2008)」を出版しており、これ

も茨城の海洋生物研究の歴史が解説されている。このような埋もれやすい地域生物研究の成果をきっちり書きとめるのは地域研究者にしかできない技である。(田中次郎)

□大野正男：「牧野植物図鑑」をめぐる一
村越三千男・名和 靖との関係― 日本古書
通信 (949): 36-37; (950): 22-23. 2008.

大野氏は博物学関係の雑誌、文献のコレクターとして著名であり、定期刊行物のバックナンバーを完璧に揃えていることで知られている。はじめは協力関係にあった牧野富太郎と村越三千男が次第に離反し、ついに牧野植物図鑑に「警告」が書かれた経緯は、これまでも何人かによって論じられてきた。著者はそれを踏まえた上、それまでは「図譜」という文字が用いられてきたのに「図鑑」と名付けられた理由、さらに個人名を冠しないのが普通だったのに「牧野植物図鑑」と冠図鑑になったわけを、豊富な資料から推定している。「～図鑑」という書名をわれわれは何の気なしに受け入れているが、意外なことに「植物図鑑」という呼び方は、かつては村越系のものに限って使われており、それ以外は出版社に関係なく「～図譜」を用いるのが普通であったようだ。「植物図鑑」という名称があちこちの出版社で使われるようになったのは、戦後になってからだという。

牧野のはじめ村越と共に植物図鑑出版にかかわった関係で、離反後も北隆館から植物図鑑を刊行することになった。このとき村越の植物図鑑と区別する必要から、「牧野」を冠した書名にしたと考察する。しかし牧野はその理由を序文で説明していない。これについては、牧野と同じ時期に東大動物学教室での研修を経て、岐阜で教職の後に独立して名和昆虫研究所を設立した、名和 靖の行動を牧野が意識していたと考察している。牧野図鑑に先行した名和日本昆虫図説には「名和」を冠した理由が「他日天下に続出すべき他の昆虫図説と区別せんが為」と説明されているが、「牧野」を冠した理由がこれと同じだったことが、牧野の筆を走らせなかったのだろうと推察している。(金井弘夫)

□深泥池七人委員会編集部会 (編著)：深泥池の自然と暮らし. B5版. 247 pp. 2008. ¥3,150. サンライズ出版. ISBN: 978-4-88325-357-9.

京都の深泥池ほど古代から利用され、かつ近代の自然保護意識の発展と共に、繰り返し調査研究の対象になった池はあるまい。巻末の12頁にわたる深泥池年表から、それをうかがうことができる。

第1章：深泥池とは、第2章：深泥池生物群集の成り立ち、第3章：深泥池の文化と歴史、第4章：深泥池生態系管理への取り組み、第5章：深泥池の将来展望の5章より成る。最近の調査を過去の結果と比較して変遷を明らかにし、それを将来の予測と対策につなげる意図が見て取れる。一方第3章では、人文的な分野にも目配りして、自然史ばかりの問題ではないことをアピールしている。各章の先頭頁には「この章のめざすところ」という見出しの、要約というかスローガンが示されており、多数のカラー写真や図を用いて、一般の人にも実情や問題点を分かりやすく説明しようとしている。

深泥池は周辺に石器時代、縄文時代、古墳時代、歴史時代の遺跡や窯跡が密集し、人口の多い京都盆地の農産物、建築材、燃料の供給地でもある上、鞍馬や貴船への通過地点でもあるという立地の故に、常に人との交渉を持ちながら存在し続けてきた。ところが池自体は、溜池として造られたものの、灌漑用としてはさして重要な役割を果たしてはいなかったように見える。それにもかかわらず、埋め立てられもせず高層湿原や浮島が温存され、近代の目から見ると貴重な生き物の生息地であり続けることができたのは、地域の識者が事あるごとに手綱を締める行動をとった結果である。尾瀬ヶ原や釧路湿原とは異なり、文化の密接な干渉を受けながら今日に至った生態系として、他のいわゆる自然生態系の行方を予測する上で、たいへん貴重なキーを内蔵している。一読をお勧めする。(金井弘夫)

□今枝由郎：ブータンに魅せられて。岩波新書112. 191 pp. 2008. ¥740. 岩波書店. ISBN: 978-4-00-431120-1.

著者はフランスへ帰化したチベット仏教史